

図書館だより

No.75
December, 2009



目 次

巻頭エッセイ レイモンド・チャンドラー -ハードボイルドの世界-

・・・・・・・・・・校長 前田 三男・・・・・・ 1

読書のすすめ 森村誠一著「人間の証明」・・・・・・・・・・一般理科 中山 将人・・・・・・ 3

小川洋子著「博士の愛した数式」・・・・・・・・・・一般理科 榑崎 亮・・・・・・ 4

文章力の向上と数学的価値の狭間で・・・・・・・・・・一般理科 酒井 道宏・・・・・・ 5

私の一冊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・各学科学生5名・・・・・・ 7

リレー連載「古典への誘い」 わが師、わが友、夏目漱石

・・・・・・・・・・一般文科 中畑 義明・・・・・・ 8

平成21年度前期図書館利用統計・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

Information 編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

Kurume National College of Technology library
久留米工業高等専門学校図書館

◆高専祭風景



レイモンド・チャンドラー — ハードボイルドの世界 —



校長 前田 三男

「ハードボイルド」という記号

最近、村上春樹氏の訳でレイモンド・チャンドラーの代表作「ロング・グッドバイ（1953）」と「さよなら、愛しい人（1940）」を立て続けに読みました。私も若い頃には探偵小説を乱読した時期がありましたが、その後私の読書のレパートリーからは、その種の小説は外されていました。それにもかかわらず、私の頭の中にはいつの間にか「ハードボイルド」といえばこれ以外にはないという堅固なイメージができていました。それはソフト帽を斜めにかぶったハンフリー・ボガートが演じる私立探偵フィリップ・マーロウの姿です。今回その原典を読む間も、私の脳裏にはつねにボガートのイメージがありました。

もっとも、チャンドラー原作のハードボイルド映画にハンフリー・ボガードが出演したのは、1946年に作られた「三つ数えろ」1本しかありません。これはチャンドラーが最初にマーロウ探偵を登場させた長編「大いなる眠り」の映画版です。もう1本、ハードボイルドの元祖とも言われるダシール・ハメット原作の「マルタの鷹（1941年制作）」も、ハンフリー・ボガードが主演した重要な作品です。

「ハードボイルド」という言葉自体は、既に死語と化しているような気がします。誰でも一応はその言葉を心得ており、世の中に共通したある種の「記号」として生き残っているようです。私について言えば「三つ数えろ」と「マルタの鷹」の2本に登場するタフで非情な私立探偵が、「ハードボイルド」という記号を形作っています。しかし、若い人たちはおそらくこの2本の映画を見ていないでしょう。その場合には有名な「カサブランカ（1942）」を思い描いていただくと、「当たり前といえども遠からず」です。「カサブランカ」は本質的にはメロドラマで、本物の「ハードボイルド」とは言えませんが、同時代の映画なので一

応の雰囲気は味わえますし、前にあげた2本に比べるとずっと分かりやすい映画です。

今日でも無数に作り続けられているミステリー系のアクション映画やTVドラマには、いくつかの歴史的なルーツがあります。シャーロック・ホームズを思い浮かべれば分かるように、もともと推理小説は「犯罪」と「謎解き」をルーツに生まれたものです。しかし映像化して見せるには、それだけでは物足りないことが多いので、1930年代にギャングやヤクザを登場させたアクション映画が生まれました。さらに1941年の「マルタの鷹」を出発点にして、人間の暗黒面を描いた犯罪映画（フィルムノアール）が、ハリウッドではたくさん作られました。またアクション映画では、超人的な能力とタフさとカッコよさを兼ね備えたヒーロー、あるいはアンチ・ヒーローが大きな役割を果たします。そのいずれにおいても、ハメットやチャンドラーによって創造された「ハードボイルド」のスタイルが基本になって今日まで続いてきたように思われます。



映画「マルタの鷹」で私立探偵サム・スピードを演じる
ハンフリー・ボガード

チャンドラーとハリウッド映画

ここでチャンドラーとハリウッド映画との関係を

もう少し掘り下げてみましょう。彼は20年以上もハリウッドのすぐ近くに住んでいましたし、探偵のフィリップ・マーロウが活躍する舞台もロス・アンジェルスです。彼の小説には、ハリウッド映画ではお馴染みのとてつもない富豪や金髪美人や娼婦やヤクザが盛んに登場します。チャンドラー自身もある時期映画の脚本を書くことに興味を持ち、実際に数本の脚本制作に参加しています。その中で後世に残る名作は、アルフレッド・ヒッチコックの「見知らぬ乗客（1951）」とビリー・ワイルダーの「深夜の告白（1944）」です。ところがチャンドラーはそのどちらでも、監督のヒッチコックやワイルダーとウマが合わず、トラブルを起こしたことが知られています。ここではワイルダーの場合をご紹介します。

ドイツ出身のワイルダーは、1930年代半ばにハリウッドに渡り、最初は脚本を書いていた。脚本家出身の監督は大抵そうですが、ワイルダーは特に脚本至上主義といってもいいほど、脚本づくりの段階で作品を練り上げるタイプの人でした。彼は脚本を書くとき必ずもう一人相棒を加えましたが、この相棒の選択は重要で、それによってできあがった作品の性格まで決まるほどでした。

チャンドラーの「大いなる眠り」を読んで感動したワイルダーは、J.M.ケインのミステリー「Double Indemnity」を映画化するにあたり、彼をその相棒に選びました。チャンドラーがハリウッドに足を踏み入れたのはこの時が最初ようです。「ボルサリーノ製のソフト」をかぶり、シカッとしたボガート風の男を想像していたワイルダーの前に現れたチャンドラーは「くたびれた青白い顔の中年男」で、彼に言わせると「典型的な公認会計士」の風貌だったそうです。その上チャンドラーはかなり強度のアルコール依存症の状態でした。

その後半年に亘る脚本制作の期間、2人はことある毎に衝突し、最後にはワイルダーをして「一緒に働いたライターの中で、あんな腹の立つ野郎はいなかった」と言わしめました。しかしこうしてできあがった作品「深夜の告白」はなかなかの出来栄えて、その年のアカデミー作品賞・脚本賞にノミネートされましたが、惜しくも賞は逃しました。悔しがったワイルダーは次の年に「失われた週末」をつくり、1946年のアカデミー賞4部門を制覇しました。こ

の映画はアルコール依存症を主人公にしたもので、この病に冒されていたチャンドラーとの苦いつきあいの経験が生かされているようです。ワイルダーにも「転んでもただでは起きぬ」抜け目のなさがありますね。

チャンドラーと村上春樹

ワイルダーやヒッチコックがチャンドラーとうまくいかなかった理由はいくつもありますが、根本的に映画作りに対する姿勢が違っていたのではないのでしょうか。「三つ数えろ」や「マルタの鷹」は実に筋が入り組んだ映画です。何人かの人物が殺されますが、映画が終わっても私は最初、誰が誰を殺したのかよく分かりませんでした。ワイルダーやヒッチコックの映画には見る人に対する気配りが行き届いて、そういった混乱は決して起こりません。

といっても、「三つ数えろ」や「マルタの鷹」は決してできの悪い映画ではありません。これらを作ったハワード・ホークスとジョン・ヒューストン監督は優れた手腕の持ち主で、原作の雰囲気や忠実に伝えていきますし、個性豊かな登場人物の性格描写も実に的確です。映画に見られる辛口の「難解さ」は、原作そのものが持つ性格なのでしょう。

今回、村上春樹氏の訳でチャンドラーを読み、映画の場合と同様の硬質な肌触りを感じました。普段村上氏が書く小説はとても明快で読みやすい日本語で書かれています。それに比べるとその訳文は決して読みやすいとは言えません。読み通すにはかなりの根気が必要でした。簡潔でありながら飛躍する言い回しや、軽妙な会話や地口、独特の比喩はチャンドラーの文体の特徴のようで、氏はできるだけ忠実にそのニュアンスを伝えようと努力されているようです。話がしばしば本筋とは関係ない遊びに似た迷路に入り込む場合も、省略しないで丁寧に訳されています。それでもフィリップ・マーロウの目によって、あるがままに正確に切り取られていく乾いた情景と、意外性に富んだ小気味よいプロットの進行は、読者を強く惹きつける魅力を持っています。

村上春樹氏は訳書「ロング・グッドバイ（早川書房）」の終わりに、チャンドラーの文章の特徴や、彼から受けた影響について、実に明快に分析しておられるので、それ以上私が付け加えることはありません。

せん。そこに多くの具体例で示されているように、チャンドラーの文章の鋭い表現力と独創性は純文学の立場から見ても、際立って高いレベルにあるようです。

村上氏の小説はミステリーではなく純文学に属しますが、そこに「ハードボイルド」風のスタイルが採り入れられ始めたのは、1985年に出版された「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」からではないでしょうか。この小説は「世界の終わり」という静的な章と、文字通り「ハードボイルド・ワンダーランド」と名付けられたSFアクションドラマ風の章とが交互に展開され、最後に両者が合一する形式を取っています。この「パラレルワールド形式」は、今話題の「1Q84」に至るまで、幾度も繰り返し使われてきました。そして「1Q84」では「ハードボイルド」的な傾向はますます強まって、

手に汗を握るようなプロットのおもしろさを満喫できます。

しかし、村上氏の小説に「ハードボイルド」的要素が強まったのは、氏のもっと本質的な変化によるのかもしれませんが。彼の小説に從來から一貫して流れる重要な主題は、「個人」という傷つきやすい存在と、それを取り巻く家族や国家や社会といった、彼が「システム」と呼ぶ側から加えられる否応なく冷酷な「暴力」との葛藤でした。初期の作品では「個人」を「システム」から守り、そこからいかにして逃走するかが主なテーマでしたが、ある時期から「個人」がそういった「暴力」に対峙してゆく姿勢が生まれました。それはチャンドラーがハードボイルド小説で描いた「暴力」との闘いと同質なものです。「ハードボイルド手法」が氏の小説で重みを増してきた理由も、そこにあるように感じられるのです。

特集 読書のすすめ

森村誠一著「人間の証明」

一般理科 中山 将人

この原稿の依頼をいただいたとき、さてどうしようかと困ってしまいました。私は生まれながらの読書嫌いで、これまで読んだ本は大した数にならない。だいたい、集中力がなく、読み始めるとすぐに寝てしまう。学校の宿題でよく「読書感想文」なるものが出されたが、何を書いてよいのか分からなかった。ストーリーを書くのか？批評を書くのか？国語という教科が苦手だったので仕方がないことではあるが・・・

このような私でも、ふと本を買って読み始めることがある。それは、テレビドラマや映画で取り上げられたものの原作本を読むことである。順序としては逆なのだが、昔からテレビや映画はよく観ていた。ここで紹介する森村誠一著「人間の証明」も映画から？入った。と言っても、映画の公開は1977年で当時の私はまだ幼稚園児である。しかも、映画は今に至っても観ていない。だが当時話題性はあった。

映画の製作は角川春樹が手掛けており、当時の角川映画はとにかく有名な俳優と莫大な制作費をかけて映画を作り、現に大物俳優である岡田茉莉子、松田優作、ジョージ・ケネディなどを起用している。なかなかテレビでオンエアされないことや、ビデオなどのメディアが手に入りにくかった昔と比べて、映画を観る機会は格段に今のほうがあったのだが、何故か映画は未見で、私にしては珍しく原作本から先に入った。ストーリーは、およそ以下のとおりである

東京・赤坂の高層ホテルの、展望レストランのある最上階に到着したエレベーター内で、腹部を刺されたまま乗り込んできた黒人青年が死亡した。事件は殺人事件と断定され、麹町署に捜査本部が設置される。捜査を担当することになった麹町署の棟居（むねすえ）弘一良刑事らは、被害者の名前がジョニー・ヘイワードであり、彼をホテルまで乗せたタクシー運転手の証言から、車中でジョニーが「ストウハ」

と謎の言葉を発していたことを突き止める。さらにタクシーの車内からは、ジョニーが忘れたと思われるボロボロになった『西條八十詩集』が発見されるが…。

つまりこの話は殺人事件の解明である。黒人青年ジョニーを誰が殺したのか？という謎をさまざまな出来事や人間関係を絡めて展開していく。特に謎めいて美しいのが、西條八十の詩の一節「母さん、僕あの帽子どうしたでせうね ええ、夏、碓氷峠から霧積へ行くみちで 溪谷へ落としたあの麦藁帽ですよ…」。

これは黒人青年の過去に関係することであるが、彼は終戦直後の日本で、黒人アメリカ兵の父と日本人の母との間に生まれた。幼き頃、父母に連れられて行った霧積温泉の思い出をたどり、アメリカから日本へ母を捜しにやってきた。ところが、彼は「ストウハ」「キスミー」などという奇妙な言葉を残して殺されてしまう。日本の棟居刑事やアメリカのシュフタン刑事の粘り強い捜査が実り、犯人は実の母であることを突き止めていくのだが、いか

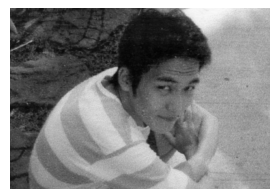
んせん状況証拠ばかりで確証がない。そこで棟居刑事はある賭けに出た。実の子を殺したことを自白することにより、この母にまだ人間の心が残っていることを。そしてそれが「人間の証明」であることを。

既にネタばれになってしまい、ご容赦いただきたい。読み始めからおおよそ犯人はわかってしまうこと、証拠を突き止めていくには時間がかかるのに、犯人の自白が唐突すぎる、過去の出来事があまりにも偶然的に現代につながる、などの欠点はあるものの（それでは薦めなければよいのだが）、それなりに読みごたえはある一冊である。

この他にも森村誠一の「証明シリーズ」として、「野生の証明」や「青春の証明」などがある。「野生の証明」は「人間の証明」と同じく角川春樹が1978年に映画を製作しており、高倉健、薬師丸ひろ子などが出演した超大作として話題を集めた。興味のある方は読んでみてほしい。また、これが棟居刑事シリーズ（西村京太郎で言えば十津川警部シリーズか？）の記念すべき第1作である。

特集 読書のすすめ

小川洋子著「博士の愛した数式」



一般理科 榎崎 亮

この9月に久留米高専に赴任してきました、一般科目（理科系）の榎崎です。今年は新型インフルエンザが登場し久留米高専でも猛威をふるっていますが、このインフルエンザはウィルスによって感染することは知っているでしょう。ではウィルスとは生物なのでしょうか？生物ではないのでしょうか？この疑問に関して、福岡伸一著「生物と無生物のあいだ」という本があります。タイムリーですので、これを紹介しようかと思いましたが、私の専門は数学ですので、今回はやはり数学にちなんだ本にしようと思い直しました。前述の本について興味がある人はぜひ生物の専門の先生に聞いてみてください。

さて、小川洋子著「博士の愛した数式」は

2003年に発売された小説で、80分しか記憶が持続しない元数学者とその数学者の家で家政婦として働いている女性、そしてその女性の10歳の息子の3人の日常が描かれています。

また、2006年には寺尾聡と深津絵里の主演で映画にもなっているので知っている人もいるかと思いますが。記憶が持続しないという設定は、その持続時間に差はあれいろいろなところで使われています。最近では映画「パコと魔法の絵本」は主人公が1日しか記憶が保てない少女の話でした。そこでその設定をどう生かすかが重要になるのですが、「博士の愛した数式」ではそのタイトルのとおり数式がキーワードになっています。もちろん数式といっても“定数係数非斉次線形微分方程式”といったような高専

の授業で学ぶ難しそうな名前のものではなく、友愛数（鳩山総理とは関係ない）や完全数、双子素数といった説明を聞けば誰にでもすぐわかる自然数の性質に関する事柄です。例えば主人公の一人「私」の年齢は完全数のひとつ、28です。人が一生のうちに完全数の年齢を迎えられるのは現在の寿命では高々2回しかなく、多くの教職員の方々はもう2度と完全数の歳になることはありません。幸いな事に学生達はまだ28歳ではないですから、およそ10年後に迎える誕生日にこの数字を思いだすかもしれません。

数式と登場人物3人の日常のからみも面白いのですが、それとは別に“野球”というも話の重要な鍵になってきます。「私」の10歳の息子は野球をしており、「博士」もまた野球を愛しています。数学者と野球との組み合わせが不思議に思われるかもしれませんが、私が8月まで所属していた大阪大学のある数学の先生は大の阪神ファンで、阪神の優勝した試合をビデオで何度も繰り返し見た結果、一試合のすべての配球や打球の行方を言えるようになったほどです。ちなみに著者の小川洋子は兵庫県に住んでいるので、「博士」も福岡ソフトバンクホークスではなく阪神タイガースのファンですが、来年から城

島も阪神にいくのでまあ大目に見てください。

もう一度数式に戻りますが、この小説では数学の最も美しい定理のひとつであると言われるオイラーの等式がでてきます。これは3年生の前期で学ぶオイラーの公式の特別な場合で、この等式を数式で書くならば3秒もあればできます。それを小説では文字でどう表現しているか。すでに公式を学んだ人は思い出しながら、まだ学んでない人や忘れてしまった人は想像しながら読んでみてほしいと思います。

また、著者の小川洋子が大阪教育大学で数学者達とした対談をもとに、小説の背景や使われている数式についてなどをより詳しく知ることができる本がでていきますので、気になる人は小川洋子、菅原邦雄、岡部恒治、宇野勝博著「博士がくれた贈り物」も読んでみるといいでしょう。

最後に余談ですが、映画の「博士の愛した数式」には数学的な間違いが少なくとも一つあります。小説だけではなく一度映画も楽しんだ後に、どこが間違っているのかを探してみるのも楽しいのではないのでしょうか。

特集 読書のすすめ

文章力の向上と数学的価値の狭間で



一般理科 酒井 道宏

以前、岐阜から人事交流制度で期限付きの転任をしてきたときに「読書のすすめ」を書かせていただきましたが、このたび正式に転任した結果、2度目の新人教員ということになり、その罰として？再び書く機会を与えられました。今回は多くの学生に小学生並みの文章力だと酷評されてしまったので、今回はちょっと本気を出してみようと思います。

本稿が皆さんの手元に届くのは今年も終わりに近づき頃だろうと思います。思い起こしてみると、今年はWBCの連覇で始まり野球部の約20年ぶり

の全国高専大会出場、ヤンキースのワールドシリーズ制覇で終わった充実したシーズンでした。どれも印象的ですが、中でも感慨深いのは全国高専大会に出場したこと。以前面倒を見てもらって？いた選手やマネージャー達のたくましく成長した姿を再び見ることができ、そして一緒に楽しい時間を過ごせて大変光栄でした。実は岐阜も出場していましたので、私にとっては二重の喜びとなりました。球場で両校が並んで入場行進をしているのを見たときには何か不思議な感覚にとらわれました。

ここ数年は毎年のように岐阜と久留米を行ったりきたりしているせいか、自分がどこにいるかわからなくなってしまうことがよくあります。まるで、転送装置を使って岐阜と久留米を瞬間的に移動しているかのようです。転送装置といえば、SFでよく使われていますが古くは40年前にアメリカで生まれ、その後現在まで世界中で最も人気のある SF シリーズの1つ、そう、スタートレック(≠スターウォーズ)が有名です。キャラクターでは耳の尖った宇宙人のミスター・スポックをご存じの方は多いでしょうが、スタートレックの魅力は、徹底したリアリズムによる 22～24世紀の未来描写、個性豊かなキャラクターの人間模様、SF であることを忘れない高度な特殊効果、現代でも抱える問題に挑むクルーの苦悩、長いシリーズに裏打ちされた精密な設定、ちりばめられたユーモアなどたくさんあります。

基本的にはTVドラマが主流ですが、今年の夏には

11作目の映画が上映されましたし、これらのノベライズ本やオリジナル小説もハヤカワ文庫などから多数出版されています。昨年は名古屋から岐阜に通勤していましたので、電車の中でこの本を楽しく読んでいました。科学的な記述が多いですし、何といってもSFですから好奇心旺盛な皆さんにも受け入れられるのではないのでしょうか。図書館にあると思いますが、私も何冊か持っていますので興味のある方は是非一度私の研究室にお越し下さい。

以上、何とかここまで懸命に書いてきましたが、まだ実力の30%くらいしか出せていないかもしれません。ただ、私の専門分野の(ホモトピー)不変性の観点からすると、文章力の向上よりも不変性：

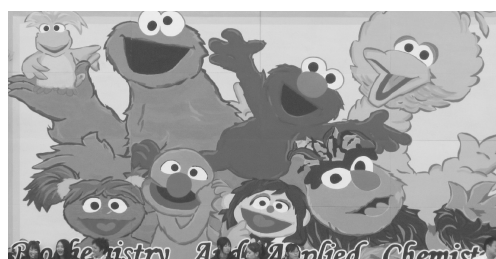
$$(2年前の文章力) = (現在の文章力)$$

の成り立つ方が価値があることになってしまい、文章力のなさを嘆くべきか数学的な価値を見出して喜ぶべきかのジレンマに陥っています。

◆高専祭風景～体育祭看板～



▲機械工学科



▲生物応用化学科



▲制御情報工学科



▲電気電子工学科



▲材料工学科

私の一冊

東野 圭吾 著
怪笑小説

集英社

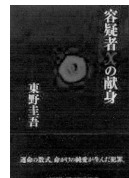


今回私がこの場を借りて紹介させていただく本は、東野圭吾さんの「怪笑小説です」。この本は9個の短編小説が収録されている短編集なのですが、その短編小説1つ1つがとてもおもしろく、読んでいて笑いがでます。どんな内容かは、ご自分で読んでお確かめください。とにかくおもしろいですよ。また、1つの話が20～30ページ程ですので、ちょっとした時間に読めますし、読書が苦手という人もこれくらいの量なら楽に読めると思います。皆さん、是非一度この本をお読みください。

(機械工学5年 薦田 亮介)
【図書館所蔵情報】 ◇購入予定

東野 圭吾 著
容疑者Xの献身

文藝春秋



高校教師の石神は密かに恋をしていた。その女は石神の隣の家に住む靖子。しかし、靖子達は無理やり復縁を迫る元夫を殺してしまった。これを知った石神は彼女達を守るために完全犯罪を企てる。実は石神は探偵ガリレオ湯川学の学生時代の親友であり、天才数学者だった。何かの因果が湯川学がその謎に挑戦することになる。この本は探偵ガリレオシリーズの一作だが、ただのミステリー小説ではない。不器用な男の真っ直ぐな愛を綺麗に、さらに残酷に表現している。やはり、東野圭吾はすごい。また、映画化されているので、映画と原作を比べるのもいいかもしれない。

(制御情報工学3年 船越 亘)
【図書館所蔵情報】 913H92

エリザベス・コーディー・キメル 著 千葉 茂樹 訳
エンデュアランス号大漂流

あすなろ書房



シャクルトン率いるエンデュアランス号のことを、この本を読むまで知らなかった人はたくさんいることでしょう。この本の内容は、エンデュアランス（不屈の精神）という名を持つ船に乗って南極大陸を目指した探検隊の記録である。今の時代より船も服も装備も粗末な時代の壮絶な漂流の記録である。次から次へと困難な状況に陥っても、希望を失わず、一つ一つ壁を乗り越えていく。その姿はまさにエンデュアランス＝不屈の精神の名にふさわしい。そして、様々な逆境を笑いながら乗り越えたシャクルトン隊は、一つの奇跡を起こしました。読むものに生きる喜びと勇気を与えてくれる物語です。

(材料工学5年 福島 周佑)
【図書館所蔵情報】 ◇購入予定

ルイ・フェルナンド・セリーヌ著 高橋 和彦 訳
城から城 D'undâteau l'autre
(セリーヌの作品第7巻)

国書刊行会



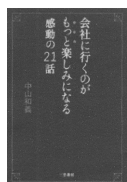
本質的に、我々個人が感じる社会の歪みというものは、決してその上辺だけに起因するのではない。我々の持つ資質が劣等だからこそ、感じる。

それに気づきながら、解決策を提示することがなかったのが、セリーヌが知識人らと隔てられている要因だ。彼は何の展望も持ちあわせてはいなかった。この書にしろ、語られるのはただひたすらの怨嗟であって、そこにはなんの希望も縁取られてはいない。しかしその中に、彼なりに考え出した、せめてものアフォリズムが点在している。そしてそれが未だ私たちの胸を打つということは、まだ何も解決されてはいないという事なのだろう。面白いことに。

(生物応用化学3年 林 凌)
【図書館所蔵情報】 958S11(7)
(セリーヌの作品全15巻所蔵有)

中山 和義 著
会社に行くのがもっと楽しくなる感動の21話

三笠書房



この本の中で一番心に残ったのは『今日誰の人生を変えましたか』という言葉です。『他人の人生を変えるような事してない』と思いましたが『人は誰かしら影響を与えています。それが人生を変えていくのです』ともありました。自分が与えた影響ではなく与えられた影響を考えると、挨拶されたら嬉しかった等小さな事で気持ちが変わっている事に気付きました。こうした些細な事で誰かに影響を与えられているという事は私も影響を与えているのではないかと思い、毎日少しでも多く笑顔で挨拶をしようと思いました。このようにこの本には些細なことですが学ぶ事が沢山あります。是非皆さんも読まれてみては如何でしょうか。

(専攻科物質工学専攻2年 吉崎 舞佑子)
【図書館所蔵情報】 ◇購入予定

リレー連載「古典への誘い」

わが師、我が友、夏目漱石



一般文科 中畑 義明

明治の文豪といえば、森鷗外と夏目漱石を思い出すのが一般的でしょう。この二人の文学者は創立まもない東京帝国大学で学び、ヨーロッパに留学し、共に将来を期待されました。しかし、二人の人生は全く違う方向へと向かい、家族の受け止め方も全く違いました。

森鷗外は2度結婚しますが、二人の奥さんと子供たちから「父は立派な人」と言われました。なる程、鷗外は軍医として一時小倉に左遷されたというものの軍医総監という最高の地位まで上り詰め、さらに大文学者のみならず、帝室博物館(現在の国会博物館)総長や帝国美術院(現日本美術院)初代院長を務めるなど、出世街道を驀進しました。家でも威厳があり家族にも近寄りがたい雰囲気をもつことは無かったそうです。

一方、漱石は国費留学生第1号として英国留学が終わると東京帝国大学で日本人初の教師としてラフカディオ・ハーン(日本名小泉八雲)の後任になります。しかし、彼はあっさりとその職を捨て、小説家に転身するのです。当時の小説家の地位は大変低く、誰もが驚きました。その上、文部省が博士第1号を漱石に授与しようとする、それも辞退し、妻や子供からもへそ曲がり、変人、いやそれ以上だと受け止められていました。

このような二人の明治の大文豪ですが、漱石は未だに読み継がれていますが、鷗外は話題になることも余りありません。なぜなら漱石の作品には時代を越えた哲学的命題がありますが、鷗外には

それが足りないのです。きっとその違いは二人の生い立ちが深く関わっているのでしょう。鷗外は年齢を多く偽って大学に入学するほどの秀才でしたが、漱石は「恥かきっ子」として親に捨てられるような扱いを受けました。漱石は自らの生に疑問を抱き「人生とは何ぞや」と悩み、大学に入る前に落第をする始末です。だからこそ漱石は小説家として生きる意義を終生模索したので、彼の作品を通して漱石の心の軌跡を辿ることができるのです。それが漱石文学の醍醐味であり、時代を超越して読み継がれている理由なのでしょう。

私は思春期に漱石と出会い、彼と共有する思いも手伝い、特に人生に悩んだり、躓いたりした時にはいつも彼がそばにいて、相談相手になってくれるように感じてきました。いわば、夏目漱石は私にとって最大無比の師であると共に無二の友でもあると思っています。

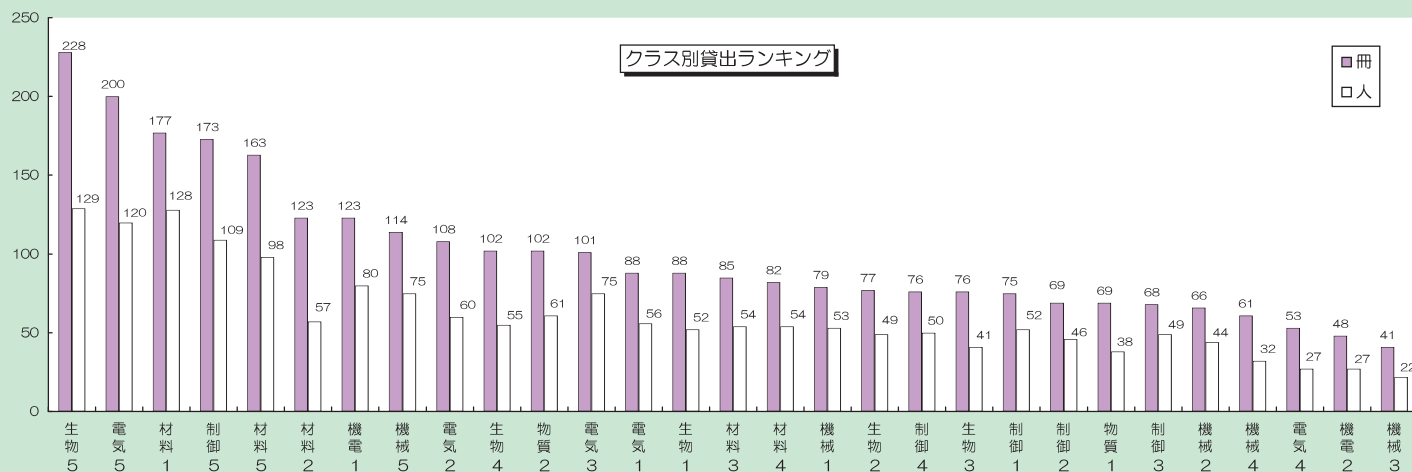
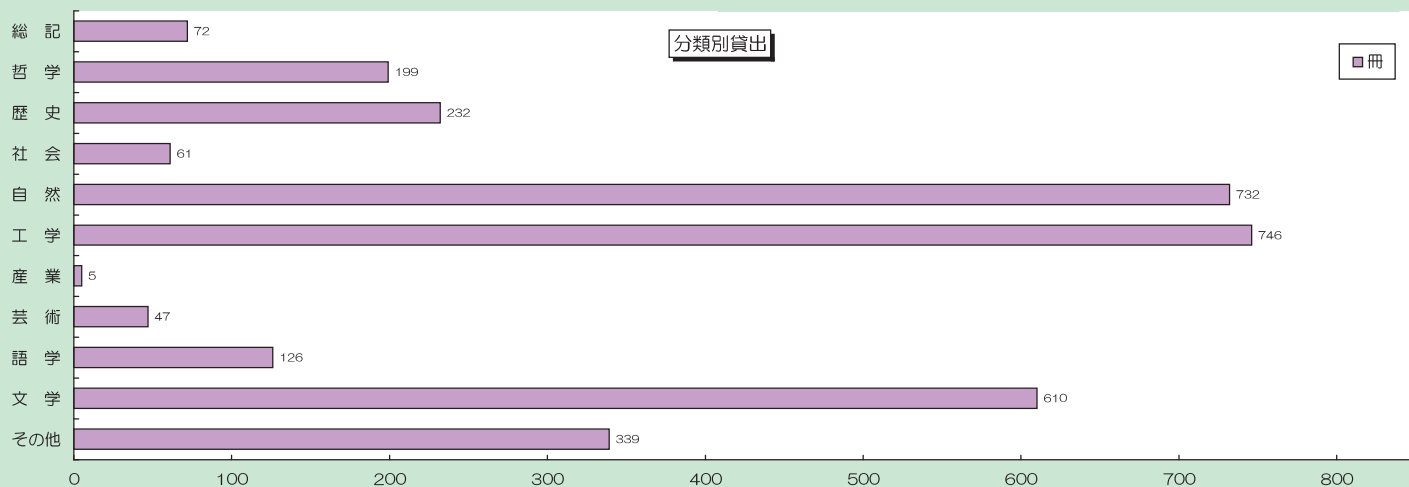
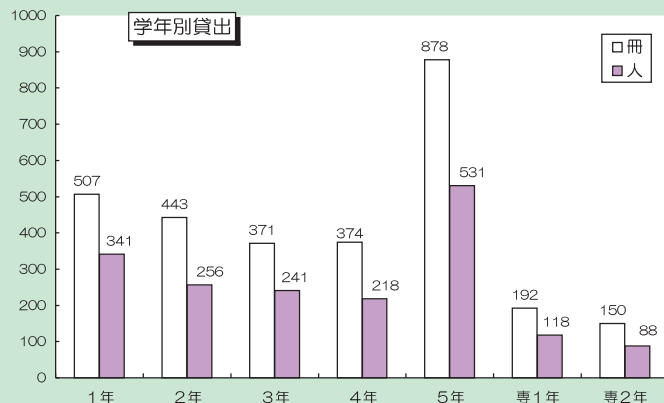
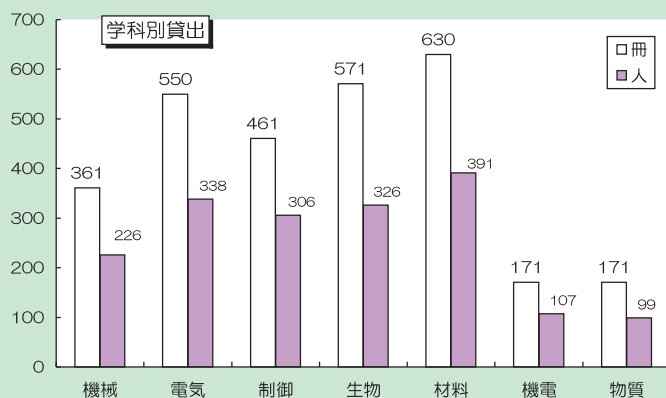
まずは『吾輩は猫である』でも読んでみませんか？



平成21年度前期 図書館利用状況

◆開館日数及び入館者数

月	開館 日数	入 館 者 数				一般利用者数 (内数)	一日平均入館 者数 (四捨五入)	開 館 時 間
		平	日	土曜日	合 計			
		時間内	時間外					
4	24	3,325	325	115	3,765	17	139	※平日（時間内）9時～17時 ※平日（時間外）17時～20時 ※土曜日 9時～17時 ※夏季休業期間 9時～17時 (8月30日は通常授業を実施)
5	23	2,910	598	203	3,711	10	161	
6	26	3,062	844	211	4,117	7	158	
7	25	2,421	357	87	2,865	11	115	
8	20	1,454	50	0	1,504	10	75	
9	23	2,633	853	220	3,706	14	161	
合計	141	15,805	3,027	836	19,668	69	139	



information

下記のとおりお知らせしますので、開館時間等の変更にはご注意ください。

◆特別(長期)貸出について◆

冬季休業中の特別(長期)貸出を下記のとおり行います。

- ・貸出期間：12月17日(木)から12月24日(木)迄
- ・返却期日：1月7日(木)
- ・貸出冊数：5冊以内

(一般利用者及び教職員は従来どおりです。)

◆卒業・修了予定者への貸出等について◆

今年度卒業・修了予定者への貸出は下記のとおりです。

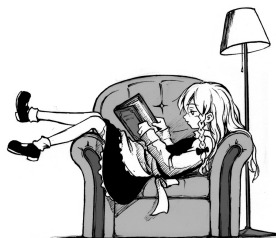
- ・貸出期間：2月26日(金)迄
- ・返却期日：3月5日(金)迄

◆開館時間の変更及び休館日について◆

冬季休業及び年末・年始は下記のとおりです。

12月	24日	(木)	9時～20時
	25日	(金)	9時～17時
	26日	(土)	
	27日	(日)	
	28日	(月)	
	29日	(火)	
	30日	(水)	
	31日	(木)	
1月	1日	(金)	
	2日	(土)	
	3日	(日)	
	4日	(月)	
	5日	(火)	9時～17時
	6日	(水)	9時～17時
	7日	(木)	9時～20時
	8日	(金)	9時～20時

休館



図書館だより74号の記事訂正について

電気電子工学科山口崇先生の記事に、編集段階での誤りがありましたので、下記のとおり訂正しますと共にお詫び申し上げます。「読書のすすめ 未来社会への道筋を求めて」4頁左段21行から22行

誤 少ないのは、たいへん残念なことだと思います
『技能と産業技術の状態』ウェブレンは、人間には



正 少ないのは、たいへん残念なことだと思います。
『職人技能と産業技術の状態』でウェブレンは

表紙写真 加藤英二君(5A)

体育祭看板・文化祭写真・イラスト 作者の希望により氏名の記載なし

《編集後記》

どのくらいの方が気付かれたでしょうか？前号から、学生の皆さんから投稿していただいた写真やイラストも掲載しています。なぜ図書館だよりに？

>

皆さんよくご存知のこととは思いますが、図書館には、文字や数式で埋め尽くされた本ばかりではなく、写真や絵画の本、あるいはDVDやCDなどの活字メディア以外のメディアも備えられ、年々充実させています。偶然にも今回の寄稿には映画につながる本に関するものが多かったですが、将来、本校図書館でももっと気軽に映画が見れる日が来るかもしれません。

>>

図書館だよりは図書館の広報誌ではありますが、学生の皆さんの様々なメディアに関する活動を応援し、発表の場を作りたいと考えています。皆さんでアイデアを出し

合ってどんどん利用してください。

>>>

ネットで簡単に必要な情報が手に入る時代ですが、腰を落着けてじっくり調べ物をするのに図書館の存在価値が薄らぐことはないでしょう。機会があれば一度書庫の中に入ってみてください。人類の膨大な知的遺産(のごく一部)を一目で実感でき、そして圧倒される場所です。

>>>>

最後に、小子は今回でこの稿担当の任を終えます。3年間で計6回、後半は愚痴が混じってついつい長文駄文になっていく傾向にありましたが、もし万が一、本稿を愛読して下さった方がおられましたらこの場を借りてお礼申し上げます(読んだよ、とは一度も言われたことはありませんが(笑))。久留米高専図書館の今後の進化に期待しています！

(図書主幹 中坊 滋一)

発行日：平成21年12月14日

発行・編集：久留米工業高等専門学校図書館 Tel：0942-35-9306 Fax:0942-35-9307

〒830-8555 久留米市小森野一丁目1番1号 E-mail:L-staff.SAD@ON.Kurume-nct.ac.jp